

の aplasia を認めた。左 CAG にて前交通動脈を介し右側脳血管系を認めたが、右 ACA 及び MCA は共に hypoplasia で、著明な脳底部 moyamoya 血管の発達と、左 ACA を介した側副路の脳表より subependymal への発達とを認めた。左側脳血管系では、carotid fork の軽度狭窄と脳底部 moyamoya 血管の所見とを認めた。VAG では視床穿通枝群に軽度の moyamoya 血管を伴っていた。以上より、本症例における脳室内出血の機序について、類似症例と共に検討を加えた。

94) 椎骨脳底動脈にも狭窄性変化を有し特異な側副血行路を呈した Moyamoya 病の2症例

米満 勤・江面 正幸
高橋 明・藤原 悟 (東北大学)
溝井 和夫・吉本 高志 (脳神経外科)
鈴木 二郎

Moyamoya 病は主に Willis 動脈輪前半部 (anterior circulation) に動脈の狭窄性病変及び Moyamoya 血管を認める病変として捉えられているが、病変の進行に伴い posterior circulation への波及もしくはば認められることはすでに宮本らが報告している。最近我々は彼らのいわゆる “posterior Moyamoya” とは若干様相を異にする2症例を経験したので報告する。症例1は10才女児、生後8ヶ月頃より痙攣を頻発、両側内頸動脈写では典型的な Moyamoya 病の像を呈するが、脳底動脈の上小脳動脈分岐部の近位側に著明な狭窄像を認め、両側の後下小脳動脈よりそれぞれ同側の上小脳動脈への leptomeningeal anastomosis が著明に発達していた。症例2は39才男性、昨年9月頃より両上下肢のシビレ感、脱力発作にて発症、両側内頸動脈写は症例1と同様に典型的な Moyamoya 像を呈していたが、後下小脳動脈分岐部で両側の椎骨動脈は著明に狭窄し、後下小脳動脈から lepto-meningeal anastomosis を介し、同側の上小脳動脈が逆行性に造影され、また一部 Moyamoya 血管様の側副血行路を介し脳底動脈は順行性にも造影されていた。

95) 両側 STA—MCA 吻合術後 Dynamic CT scan にて著明な改善を認めた類モヤモヤ病の1例

石井 正三・尾田 宣仁 (石井脳神経外科)
石井 敦子 (同 眼科)

今回我々は類モヤモヤ病に対し両側 STA—MCA 吻合術前後に dynamic CT scan を行ない、術後に血

流改善の所見を認めた症例を経験したので報告する。

症例は49才男性で、右眼の視力低下を主訴に来院し、右網膜中心動脈閉塞症と診断され入院。X線 CT 上左半球白質内に小硬塞巣を認めた為脳血管造影を施行すると、右内頸動脈の C₂ でのほぼ完全閉塞および右眼動脈の狭窄を認めた。一方左内頸動脈は正常径であるものの中大脳動脈は閉塞しモヤモヤ血管に置換していた。また posterior circulation からは良好な側副血行路の発達を認めた。東芝X線 CT (TCT—70A) を用い、アンギオグラフィン 30ml 静注法による dynamic scan を行なうと右前頭葉中心に循環時間遅延を伴った low perfusion area を認めた。この為両側 STA—MCA 吻合術を順次施行し、dynamic CT scan にて循環動態の著しい改善を認めた。

造影剤静注法によってX線 CT で解析する dynamic scan は装備及び手技上も簡便な方法であり有用と考えられる。

96) ウィリス動脈輪閉塞症 (モヤモヤ病) の外科治療、術式別血行再建度の比較検討

上山 博康・馬淵 正二 (北海道大学)
阿部 弘 (脳神経外科)

〔対象及び方法〕 現在、本症に対し種々の手術法が施行されているが、どの方法が最も有効であるのかを知る目的で、虚血及び痙攣、不随意運動で発症し、術後の経過観察が充分な22例、42大脳半球 (2例は片側性) を対象に、術後6～12カ月目の脳血管造影、脳波、臨床症状、脳循環等を比較検討した。

〔結果及び考察〕 対象を① Bypass 群、② EMAS—EDAMS 群、③ EMS 群、④ EDAS 群の4群に分けて検討したが、術後の脳血管造影で、STA は①②④③の順で発達が良く、MMA は術式間で差がなく、DTA では④のみが不良で他は差が無かった。術前後での血管径での比較では、STA、MMA、DTA の順に血管径の増大の程度が著しく、側副血行形成能の順位を表していると考えられた。また、術後の脳波及び臨床症状改善度は、STA の発達の程度と最も良く相関しており、最も有効な側副血行路は、STA によるものと考えられた。また、発作が頻発している小児例3例で術後一過性の症状悪化をみたものもあり、これら種々の問題点についても若干の考察を加え報告する。